
まるで絶望のような

霧夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まるで絶望のような

【Nコード】

N8389A

【作者名】

霧夜

【あらすじ】

ぼくには、一人の姉がいた。彼女は二年前に事故で死んだ。もう二度と出会う筈の無い相手。でも彼女はぼくが生きている限り、いなくならなかったのだ

追憶

ぼく。名前を、景と言う。

ぼくには一人の姉妹がいた。

そいつは名前を結花といい、ぼくの姉になる。

『いた』と過去形で表現するのは、彼女が既にこの世にいないからだ。

ちょうど二年前の今日、死んだ。飲酒運転の大型トラックに轢かれて。友人と遊びに出掛けて、その帰り道に。

どこにでも転がっているような、故に誰も自分が遭遇するとは思えない、つまらない事故。

ぼくと全く同じ血を持つ姉は、呆気なく、消失した。

消滅した 筈だ。

ぼくも家族と共に、ちゃんと病院で看取った。

胴体の真ん中を、化け物が填めるような黒く大きい指輪に轢かれたのだ。腹が裂けて中が見えていた。

あちこちにこびりついた血液が茶色を通り越し、どす黒くなっていた。

元は鮮やかなピンクだったのだろう、土や砂利がついて薄汚くなった内臓達。特に衝撃的だったのは腸。

千切れ、切り裂かれ、潰れ、食み出ている、雑巾を思わせる状態だった。

でろりと。ぐちゃぐちゃで。冗談みたいに。

出てた。

無知なぼくには、それが大腸なのか小腸なのか見分けがつかなかった。

ただそれが姉の体の一部だという事だけが解っていた。

出血多量で蒼白になった顔面。開ききつた瞳孔。半開きのまま閉じられない口。汚れた頬。細かい擦り傷などで痛々しい手足。

いつも身なりに気を使い、美しく自分を着飾っていた姉とは思えない姿だった。

なによりぼくには、自分の事のように、ショックも大きかった。口から飛び出るかと思うくらい、体内で心臓が激しく暴れまわっていた。

隣でハンカチを顔に押し付けしゃくりあげている母。その大袈裟な姿に隠れて誰も気付かなかったけど、ぼくは気を失ってしまいそうな程の動揺を味わっていたのだ。

まるで病院の白いベッドに横たわる姉の姿が、自分のようで。

怖かった。

死体の凄惨な状態を、よくもまあこんなにはつきり見ているものだと、後で自分に向かって呆れたり感心したりもした。

だがそんな気持ち悪さよりも、自分が死んだのではないかという錯覚が、ぼくを恐怖の奈落の淵へと追いやっていた。

原因も解らぬままに。

……何にせよ、姉は死んだ。消失したのはぼくではなく姉だ。

それは間違いない。ぼくの方が生きていて、姉の方が死んでいる。

その筈。その筈なんだ。

だけど、どうして。

なのに何で、こんな事が

命日

その日は、じんわりとした梅雨明け独特の暑さが支配する日だった。全身にねっとり絡みつく気だるさは、何よりも気持ち悪い。ぼくの両足にもまとわりつき、足取りを重くさせた。

ぼくは姉である結花の命日の今日、ぎりぎりまで部活をして普段より遅い時間に帰宅した。既に薄暗く、夕飯間近の時刻になっている。ぼくは玄関の前で一度立ち止まった。小さく、息を吐いた。

結局今日、行かなかった。後悔のような、それとは全く違うような感情がじわじわと染み出してくる。そのせいだろつか、足は勿論、全身が酷く重かった。

頭上を仰げば、そこは橙や藍や灰や黒に染まりこれまた気持ち悪い。パレットを逆さまにして、絵の具をキャンバスにぶちまけたみたいだ。色がちやごちや入り混じって、じっと見ていると酔いそうになった。

早く終われ、今日。

ぼくは心の底から祈る。無神論者のくせに、だ。全く。

ただいまと言って家の中に入ると、奥から母が出てきた。お玉を持ったまま。母の体からは、食欲をそそる味噌汁の香りが漂っていた。

「景、お帰り。もうすぐ夕飯の仕度出来るからね。着替えたら、早めに降りてくるのよ」

「うん。解った」

母の言葉に答え、靴を脱いで揃える。ぼくはこういうのはちゃんとしてないと、何だか気になる性分だ。こういう所は、姉とは似ていなかった。ついでに片方が斜めになっていた母の靴を直した。

母がまた奥に引っ込んだのを見遣り、ぼくは二階に向かう階段を上がる。ぼくの自室は二階にあった。何故だろう、いつもより階段を上るのが億劫だ。

……勘の鋭い母の事だ、きつとぼくが結花の墓に行つてない事を解っているだろう。そうでありながら咎めるどころか触れもしなかった母に、感謝の気持ちを覚えた。

今日が姉である結花の命日である事は覚えていたけれど、でもぼくは部活を優先した。別に部活を重要視してるわけじゃない。ただ、言い訳の道具として非常に都合が良かった。

お墓に参りに行くべきかもしれない。

そう思いながら部活をした。

でも結局 行かなかった。

ぼくにとってあの姉は、なんだか苦手な人だったから。

死んだ姉の事をこんな風に言つのは良くないだろう。

でも、苦手だった。

同じモノなのに。

……止めよう。あいつの事を考えるのは。

明日は早く帰って、墓石に一日遅れで花を添えよう。

言い訳にもならない行為だとよく解っていたけど、このまま何もしないよりマシな筈。

そう決めて、部屋の中に入り、電気をつけた。

ベッド、机、クローゼット。その程度のものしかない。それらはほとんどがモノトーン調であり、はつきり言つて地味だ。ぬいぐるみやポスターなどの色を放つものは何一つ無い。あるとすれば、床一面を覆う萌黄色のカーペットぐらいだ。ぼくは明るい色より暗い色の方が好きだ。落ち着く。明色は目が痛い。

後ろ手でドアを閉める。そのまま視線を前に向け、ドアの向かいにある窓からちらりと外を見る。四角く切り取られた空はあつという間に暗さを増していた。

大量の黒をぶち込まれて、キャンバスは混沌から奈落に生まれ変わっている。

黄昏から暗夜へと、これから一気に変貌するのだ。人間の時間から、魑魅魍魎の刻へと。

何故だか漠然とした胸騒ぎを覚え、視線を逸らす。ぼくは動く事で、この言い知れぬ胸騒ぎを掻き消そうと、着替えを始めた。

ぼくの部屋の入って右側には、全身が映る大きな鏡が貫禄たつぷりに居座っている。幼少時代からずっとあつた鏡で、もう大分薄汚れている。夜中に寝ばけ眼で見ると、結構不気味だ。

鏡に投影する姿が、ぼくではなく姉のように錯覚してしまうから。いつそ捨ててしまいたい。だけど、この鏡は亡くなった祖母のものだと言つて、母や父が廃棄する事を許してくれない。

形見だから大切にしなさいって、さ。

ぼくは何となく、その鏡に背を向ける。そのまま制服のボタンに手を掛けた。

制服を手早く脱いで、ハンガーに掛ける。そして学校に行く前に用意していた服を、順番に着ていく。

ジーンズにパーカー。洒落っ気など全くない、ありふれた地味な格好。

姉にはもつと身なりに気を使えとよく言われていたけど、ぼくはそういうのが苦手だった。

……ああ。

また、姉の事を思い出している。普段なら全然思い出さないのに。今日が、彼女の命日だからか。

ぼくは小さく溜息を吐いた。

別の物事を考えようとしても、結花の姿が脳裏に浮かんでしまう。死人の癖に、奴はいつまで経ってもぼくの意識の中に存在している。ぼくの意味とは無関係に、もう一度溜息が口から漏れた。

ひゅっ

「あ……」

吐き出された憂鬱な気分は、何の加減か、口笛のように高い音を奏でた。溜息として、不相応な程に。

……口笛、か。

それから連想する事象が、ぼくの記憶の中に存在する。そしてぼくはまた、結花の事を追憶してしまった。

ぼくは口笛を吹くのが下手だ。どれだけ練習しても、空気の掠れた音しか漏れない。それに比べ、結花はとても上手だった。テレビから流れる人気歌手の歌に合わせて、見事に音程をつけ、吹いていた。結花の口笛は一種の楽器だった。

羨ましくも妬ましくもなかった。だが、ひたすら鬱陶しかったのを覚えている。

ぼくが出来ないのを知って、まるで見せ付けるように奴は吹いていた。

……あいつは、人が嫌がるモノを悟るのが非常に上手だった。

思考すればする程に、ぼくは気分が悪くなっていく。

全ては姉が理由で。

もう止めよう。

早く一階に下りて、夕飯を食べよう。そしたら気分も変わる筈だと。

無理やり思考を停止しようとした、その刹那、

ひゅー

「……え？」

背後から、肩を落とすぼくの姿を嘲笑う口笛の音がした。

この部屋には、ぼく以外誰もいない筈なのに。

どうして口笛の音なんか聞こえるんだ？

ざわりと、心の奥底がざわめく。

嫌な感じが、全身を走り抜ける。

肌を感じる温度が、一気に零下まで下がったような異質な感覚。ことごとくりの別世界に迷い込んだような、漠然とした不安感。それらをごちゃ混ぜに内包した、何とも形容し難い思いがぼくの中を去来する。

背中から全身へと。

疾風が如く、巡り行く。

後ろに、何か、

いる。

「……………」

何を馬鹿な。

辿り着いたその考えを一蹴した。ありえない。下らない。

ぼくはゆっくりと、後ろを振り返る。

背後には、鏡がある。ぼくが映っている。そうに決まっている。

振り返っても誰もいなくて、ただぼくの姿が鏡に映っている。

ぼくが体を捻って後ろを振り返ったのだから、鏡の中のぼくだって体を捻ってこっちを見ている筈だ。戸惑いの表情を浮かべて。

だけど

振り返った鏡の中のぼくは正面を向いて、静かに微笑んでいた。

「えっ……………」

そこにはぼくと同じ、そして全く違う人間が、映画のスクリーンみたいに、ぽつかりと浮かんでいた。

幽霊みたいに。

ぼくの歪んでいるであろう顔とは酷く対照的な顔を、鏡の中の物体はしている。

「　　お久しぶり、景」

そいつは口元に小さな笑みを浮かべて、口を開いた。
聞き親しんだ声が、薄っぺらの鏡からぼくの耳に届く。
この声。口調。表情。忘れない。二年経っても、決して。
ぼくが生きている限り、忘れられない。

「……………!!」

ぼくは口から出掛かった絶叫を、必死で押さえ込んだ。
なんでだ、なんでこいつがいる。それも、鏡の中に。

耳と目を塞げば何もかも無くなってしまふのなら、どんなに良かっただろう。

ぼくは今の状況を、ひたすら怨嗟した。

平面である鏡の中で、形だけの微笑を作る『そいつ』。

そいつは、二年前に死んだぼくの姉。

「うふふ。ワタシね、あの世から帰ってきたのよ。　　貴女に逢いたくて」

結花、だった。

性質

『結花』という存在は、ぼくにとって恐怖の対象だった。

ぼくは彼女と真正銘血が繋がっていたが、それでもそんな繋がりで理解できるほど姉は簡単な構造をしていなかった。

未知。理解不能。

蜘蛛の巣のように、無作為に張り巡らされた無数の神経。

マンホールみたいに、底が見えない心中。

結花の存在というのは、ただひたすら深くて暗かった。

幼い時分から黒魔術なんかの本を片っ端から読み漁り、解剖学や心理学に制限無く手を出し、無軌道な言動を繰り返す。

しかしそれも家でいる時、しかもぼくが相手である時だけにしか行わなかった。両親や周囲に対しては、そんな愚かな様子を露とも見せなかった。それどころか、優秀で理知的な子供として有望視されていたのだ。何も知らない大人達は、結花を神童や才女と呼び大切にした。

そんな姉の姿を傍で見ながら、ぼくは恐怖に近い感情を抱いていた。

あいつには魔女の名がぴったりだ。

ぼくは小さい頃から確信していた。

更に結花は聡明でありながら性悪でもあった為、優しい顔で人を甚振る最悪な人種だった。あのまま放っておけば、間違いなく他者を絶望のどん底に突き落とす人間になっただろう。

人の足を引っ張り、陥れ、引き摺り落とす事で伸び上がっていく。

そんな手が付けられない才能を秘めた存在に成長していただろうと、ぼくは常々思っていた。だから、こう言っては悪いかもしれないけど

結花が早く死んで良かったと、ぼくは密かに安堵していた。

結花がトラックに轢かれたと聞いた時、ぼくはこんな事を思った。
大きな大きな黒い輪。物語に出てくる凶悪な化け物が填める、指輪。
それが姉を轢き殺してくれた。

まるで、化け物がどこから姉を婚約者として迎えに来たように。
化け物から化け物への、求婚の証。こっちにおいで、と。

そんな下らない事をイメージした。冗談かと思うくらい結花には相
応しいと、ぼくは不謹慎ながらも納得していた。

やっと、あいつに迎えが来たのだ。
本来いるべき場所へと戻ったのだ。

そう信じていた。

死んだ状態の結花はとても凄惨で、さすがに可哀想だと思った。だ
がこれが正しいのだ。仕方が無いのだ。

だから

こうやってまた結花の姿を見るのは、絶望に相当した。

要求

目の前に現れた結花は、二年前に時間が止まったにも関わらず、ちゃんと二年分成長していた。

ぼくを、映しているからか。

服もぼくと同じ。パーカーにジーンズ。男っぽい服装。

外見もぼくと一緒。それは生まれた時からそうなのだが。

だが纏う雰囲気も、作る表情も、何もかもが異なっている。確かに別人。そうとしか言いようが無かった。

しかしそれは、二年前のあの頃のままだった。

結花は、何一つ変わっていなかった。

「ひっ……!!」

その事実気付いたぼくは、恐怖と驚愕のあまり後ずさった。

底なし沼に突っ込んだみたいに足が上手く動かない。よるけてぼくは尻餅をついてしまった。

その様子を見て、あらあらと結花が柔らかい笑みを漏らす。

鏡が蛍光灯の光を反射している所為か、彼女は所々がてらてらと光っている。

蛞蝓が這った後を思わせた。

絶望が主催した舞台の真ん中で、主役としてスポットライトを浴びているみたいだ。

観客はぼく。そして、

化け物。

「相変わらず貴女、お転婆ね。うふふ、可愛い可愛い。本当に」

くすくすと口に手を軽く当て、とても女らしく結花は嗤う。その仕草が酷く似合う。ならばくにも似合う筈なのだが、ぼくにはそんな事到底出来そうにもなかった。

いや。

似合う似合わない以前に、こいつと同じ動作などしたくも無かった。「な、何であんたが……っ!」

ぼくは屍餅をついたままで、必死で声を押し出した。掠れて震えた
みっともない音しか作れない。

完全に、ぼくは結花の気配と存在に呑み込まれていた。
道端で幽霊に遭遇しても、殺人犯にナイフを突き付けられても、こ
んなに怯えない気がする。死んでいるかどうかなど関係なく、ただ
相手が結花であるから問題なのだ。

そんなぼくの気持ちを知ってか知らずか、結花は気軽にああ、と小
さく手を打つ。ぼん、と場違いな可愛らしい音が弾け出た。

「あのね、今日は貴女にお願いがあつて、ここに來たの」
ぼくはそんな嬉々とした表情で笑う結花に、何も言えない。

死人が『お願い』だと？ ぼくに向かって、何を？

この異形である姉が、死んだ身となった今、ぼくに何を要求する事
があるのか。

そもそも何故死んだ人間が一体鏡の中から現れたりするのか。

幾つもの疑問が水泡のように浮かんできた。

だがそんな事は、結花の前では些細な疑問となってしまう。呆気な
く弾けて無くなった。

こいつならこの程度の事、至極簡単にやるに決まっている。現実
に、そうなっているのだから。

結花の世界に呑まれたぼくの喉はあつという間にかからに渴いて、
声が正確に流れない。砂漠に放り込まれたのではないかと錯覚する。
ただ微かに、空気が漏れるだけだった。まるで、判決を待つ囚人だ。
ぼくと同じ顔の姉は、相変わらずの楽しそうな顔のまま、両手を胸
の前で組んで、言った。

「貴女の体、ワタシに頂戴？」

接触

「……は？ 何、言つて……！！」

ぼくは呻いた。

一体何を。

何、面白くも無い冗談をほざいているのだ、この姉は。

「ワタシ、貴女の体が欲しくて『向こう』から来たの。正確にはもう一度『そっち』で遊びたくて、ね。だから頂戴？」

首を傾げて平面に映る姉は笑う。無邪気な子供が『玩具を買つて』と母親にねだるような仕草。子供なら可愛げがあるが、残念ながらこの姉にそんなものありはしない。断られるなんて露とも思っていないような、自己中心で傲慢な態度にぼくは激昂する。

「ふざけた事を言うなっ！」

普段なら絶対に出す事のない怒声。だが、抑えられなかった。

「何訳の解らない事ほざいてるのか知らないけど、ぼくはあんたの言う通りになる気は無いっ！ それに結花はもう死んでるだろう！

？ 何が出来るんだ、死人に！ 早く消えろ！！」

溢れ出る激しい感情を抑えきれない。それは嵐に揉まれる波となり、ぼくの中で暴れまわり、ぼくの外へ勝手に迸る。

だがぼくのこの怒りに似た思いは正当なものだ。結花が言う『お願い』とやらの方が、理不尽な事この上ない。

ぼくの様子に、結花は驚きはしたが気圧されはしない。困惑した顔で頬に手を当てる。本当に意味が解らないといった感じで、心底、腹が立つ。

本当にこいつはぼくと同じモノから出来ているんだろうか。

「どうしてそんなに怒ってるの？ 景。……そっか、貴女、いつも言ってたものね。『ぼくと結花は酷似しているけど相反している』って。まるでワタシと貴女が別物であるみたいに。そうだよ、それじゃ仕方ないよね」

「別物、だろう!？」

ぼくの荒れ狂う激情は大きくなるばかりだ。理解不能の戯言を繰り返すこいつは、異常者以外の何者でもない。そして何より。

こんな奴と同等にされなくなかった。

「そんな事ないわ。だってワタシ達、同一よ？ だからいいじゃない。ワタシと貴女の立ち位置が交代されようと、何も変わりはないのだから。『結花』が生きてても『景』が生きてても、ワタシ達にも周囲にも変化は訪れない」

「嘘だ、嘘だっ！ そんな自分勝手な事っ!!」

「嘘でも勝手でもないわ。ワタシは貴女になれるし、貴女だってワタシになれたわ。もし貴女が先に死んでたら、ワタシの体は貴女のモノになってたのよ？ ワタシは、『向こう』でそう教えてもらったの」

「……!」

「うふふ。なら、先に死んだ方が長く生きられたって事になるのかしら？ うふふふ。こういうの何て言うのかしら？ 急がば回れ

？ 何だか違うわね。ねえ景。良い言葉知ってたら教えてくれない

？」

「……………」

飾り物の笑顔の結花に、ぼくは沈黙で答えた。先程暴発した感情は既に鎮火してしまった。

この化け物に言う言葉など、最早存在していないように思われたのだ。何を口にしても、通じはしない。なら、文字を音にしたモノにどれ程の価値があるだろう。

ぼくの返答に、結花は可愛らしく溜息をついた。まだ、無駄な演技を続けてる。

聞き分けの無い子供をあやすように。

「これから生きるのはワタシなの。今更貴女が持っていてても仕方ないモノである知識を、ワタシに教えて。そしたらワタシがその知識ちゃんと活かしてあげるわよ？」

だからね、と結花は嗤った。
そして。

鏡の中で、姉がこっちに向かってゆっくりと手を伸ばした。

「こ、こっちに来るなっ……………！！」

自分でも、顔が真っ青になっているのが解る。がたがたと震える体を止める事が出来ない。

指先が、向こう側の鏡に触れた。

くぷっ

水面から顔を出すようにして。

鏡面を微かに揺らして、指先が出てきた。

事故にあった時のまま。

擦傷と血に覆われた、白くて細い指が。

「うああああっ！」

ぼくは完全な死人の手から、逃げようとした。

鏡に映っているだけなのと、そこから出てくるのでは全然違う。

こいつに捕まったら、ぼくは消失し、結花は再生する。

本能的な恐怖とこの状況を忌避しなければならないという理性が、

ぼくを突き動かした。

ぼくは座り込んだままの姿勢から跳ねるように立ち上がる。ドアに向かつて走ろうとしたが

「！？」

足が、動かなかった。

目を落とすと、ぼくの両足には

「っ！！」

無数の白い手が、絡みついていた。

柔らかい萌黄色のカーペットから突き出た、完全に血の気を失った人間の手。それがぼくの足をしっかりと掴み、この場にぼくを張り付けにしていた。

足を握る数多の手は、病的なまでに白く、靴下越しでも解るくらいに冷たい。そのくせして反対側が見えるほど透けている。なのに足を掴まれるこの感触は本物だ。死者の手が、ぼくを捕まえている。

「うふふ。驚いた？ その人達は、ワタシの『向こう』で出来た新しいお友達よ。皆、ワタシの為に手伝いに来てくれたの。とーっても、優しい人達なのよ？ 貴女が『向こう』側に行ったら、ちゃんと仲良くしてくれると思うわ」

結花はくすくすとぼくの無様な姿を嘲笑う。

どこまでもどこまでも楽しそうに。

道化と化したぼくの滑稽な姿を嗤う。

「うふふふ。ワタシは貴女になってあげる。『景』という名を、この世で一番幸せな人間の名前にしてあげる。感謝、してね？ 空の上から」

ゆっくりと結花は鏡という境界を踏み越えて出てくる。

手が、腕が、足が、胴体が、頭が。

皮膚が捲れた手が、あらぬ方向に曲がった腕が、拉げた足が、桃色の管を食み出させた胴体が、蒼白になった顔が、血に染まった全身が、死んだ存在が。

狂いきった笑みに表情を歪めて、やってくる。

「うふふ。もう、手遅れなのよ？ それもこれも、貴女が今日、ワタシのお墓に来てくれなかったからよ」

出てくる。
ぼたん、と、皮一枚で繋がっていた指が千切れて落ちた。

萌黄の床に、赤茶けた染みを作る。

それは死んでしまった青虫のようで。

酷く、おぞましい。

「……！！」

ぼくは口元を両手で覆った。

喉の奥から、何かがせりあがって来る。

ぬるぬるとした、固形物と流動物が混じり合ったモノが。油断すると、一気に嘔吐してしまう。

大量の冷や汗が、頬を、胸を、背を、手を、足を、伝う。

「ワタシ、とても寂しかったのよ？ 泣いちゃいそうなくらい」

何かを憂える表情、しかしぼくはそんな事を気にする余裕は無い。

……遠まわしに、ぼくと同じ顔の狂人が言う。ぼくに、『死ね』と。死んだ筈の姉があの子からボクに手を伸ばす。

『こつちに来て』ではなく、『変われ』と。

彼女。

結花。

姉。ぼくの代用品。ぼくのオリジナル。

ぼくの片割れ。ぼくが半身。

そして、ぼく自身。

瓦礫のようにごわついた死人の手が、ぼくの目を覆った。

冷たい。氷だ。

姉の手じゃない。ぼくの手じゃない。生き物の手じゃない。

こんなの模造品だ。ただの嘘だ。虚言だ。夢だ。

だけど現実だ。真実だ。本当だ。

何も見えない。

暗い。ここは嫌だ。

光を。ぼくに光を。

頼むから。

暗闇に。

ぼくは。

落とされて。

そして。ぼくは

消

る。

え

合致

景の部屋の鏡の前で、ワタシはぼんやり立ち尽くしていた。

蛍光灯の光を反射する鏡が眩しい。鏡の中には、本来のワタシと全く同じ姿をした人物が映っている。

この体。本当は、妹の。今は、ワタシの。

ようやく、ワタシは蘇った。

双子の妹の体を容器にして。

双子の妹の命を養分にして。

あの子、ワタシと見分けがつくようにわざわざ男っぽい喋り方をして、一人称まで『ぼく』って言うて。

馬鹿ね。一卵性双生児ってのは、元々一つのモノが二つになっただけなんだから、わざわざ分ける必要なんかなかったのに。 同じ

であれば、それで良かったのに。

そう。今のうちに。

鏡に映るように、目の前に同一として存在しているべきだったのよ。遺伝子が同一なように、魂も同一。数学的な言葉を使えば、相似ではなく、合同。

完全な、反射。

『似ている』じゃ駄目。『そのもの』にならなければ。でも、あんまりあの子の事を悪く言っちゃ駄目ね。あの子のおかげで、ワタシは帰ってこれたのだから。

こんな方法を取ってワタシはあの子を犠牲にしたけれど、でも妹だからちゃんと大事には思っていたのよ。

十ヶ月もの間、一緒に羊水の中でゆらゆらと揺られていたの。

二人、向き合って、手を伸ばせばすぐ届く場所にいたのよ。

この世で唯一、同じモノだったのに。

今日来てくれなかった。

だからこそ。

ワタシは

『ワタシ』？ ううん、違うわね。

今日からは、『ぼく』って言わなきゃ。

ワタシは、ぼく。

結花は、景。

……。

……。

『ぼくの名前は景。結花と言う名前の姉がいた』

うふふ。

これなら、いけそうね。

ああ、言葉遣いも改めなきゃ。失敗、失敗。

少しずつ、慣らしていかないと……。

って、あれ。

ドアがノックされてる。「どうぞー」

ぼくはドアに向かって呼びかけた。

その声を受けて、かちやりとドアが押し開けられる。

「景？ もうご飯よ、何してるの一体。早く来なさい」

ドアと壁の間から顔を覗かせた母が言った。

手に杓文字を持ったままだ。

変なところでうちの母はすっかりしている。

「うん。解ってるよ」

「……あら。……景、何だか少し雰囲気変わった？」

おっと。さすが母。よく解ってらっしゃる。これは母が一番の危険

人物になりそうだ。

ここはとりあえず誤魔化しの言葉が必要だ。

「うん。ぼく、今日からちよっと変わる事にしたんだ」

「何言ってるのよもう。そんな事はいいいから早くおいで」

呆れたように言って、母はドアを閉めた。

自分が話題を振ったくせに。

ぼくは小さく苦笑を漏らした。

……『そんな事はいいい』、か。

本当に。

ぼくがワタシだとか、ワタシがぼくだとか。

景が結花だろうが、結花が景だろうが。

そんな事、どうだっていいよねえ

ぼくは心の底から哄笑したい気持ちを必死で抑え、軽い足取りで部屋から出て行った。

唇の端が自然に持ち上がってしまう。せめて口笛だけでも吹きたいが、ぼくは吹けないんだ。

残念、だなあ。

結論

姉妹の片方が、いなくなりました。

今日は命日なんです。

一卵性双生児の半身が欠けた日。

だけど今日は誕生の日にもなりました。
二つにあったものが一つになった日。

いえ。

一つに戻れた日。

なんと凄いい日なのでしょう。

もう二度と離れる事は無く。
いつまでも、一緒なのです。

まるで奇跡のような絶望です。

やはり、奇跡と絶望は双子だったのですね。

.....。

……食卓には、お母さんがいるね。お父さんはまだかな？ 仕事で遅いかな。

早く帰ってくるといいのに。

まあ、いいや。

部活をして疲れたし。

お腹が減ったし。

久しぶりの食事だし。

早く食べたい。

……ああ。

そうだ。

折角姉妹が一つになれたんだ。

なら、親子でも大丈夫だね。

うん。

そうしよう。

子供は母と父の一部から出来てるんだ。彼らの体内から出てきたんだ。

なら、もう一度戻ろう。

体の中へ。

回歸しようか。

とりあえず、母親がいるから。

まずは彼女の中に。

でも、ちょっときついかもしれない。

さすがに十数年前みたいにはいかないだろう。

まあ、母には我慢してもらおう。

裂いたら入るだろうし。

拒むわない。

だって子供の為だもの。

子供は親にとって、愛しくて大事な筈の存在だ。

そして最後は父。

彼は

どうしようか。

どうやったら一つになったと言えるだろうか。

やりにくいなあ。

まあ、いいか。

どうせ今はいないんだしね。

帰ってから決めればいいや。

よし。

思い立つ日が吉日、善は急げ。

じゃあ、やるか。

さあて、と。それでは。

さようなら、
×
×。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8389a/>

まるで絶望のような

2010年10月28日08時06分発行